

エディトリアル

揖斐郡北西部地域医療センター 副センター長・診療所長 菅波祐太

地域医療の実践に悩みはつきモノだ。このまま目の前の仕事だけやっているといいのか。このままだと取り残されてしまうのではないか。他の専門医より劣っているのではないか。「identity crisis」という言葉がちらつき始める……。

しかし、もうそんなこと言っちゃってしょうがないじゃないか。目の前の仕事は患者やスタッフや地域に必要とされている仕事だ。それで十分じゃないか。そこにこそ「identity」がある。地域医療を続けていくと、そんなことがだんだん分かってくる。

本特集は、「だんだん分かってきた」若手から中堅世代の地域医療の記録である。まだまだ熟達にはほど遠い。しかし、前を向き、ちょっと胸を張って楽しみながら地域医療を実践する。そのための自分なりの流儀も生み出しつつある。そんなオレたち……。

例によって論文を一つずつ紹介したい。横田修一論文では「老健こそ家庭医の醍醐味！」と題して、老人保健施設における家庭医の実践を紹介していただいた。高齢者のケアを軸に、マネジメントと教育を組み合わせるに地域包括ケアを展開しているか、垣間見ることができる。現場重視の実直な姿勢が胸に響く。続いて、小生の担当した論文では「地域医療、総合診療、家庭医療って何だろう？」と題し、それらの定義について自由に持論を展開させていただいた。日本プライマリ・ケア連合学会の勧めるポートフォリオの形式での実践報告も試みた。ご覧いただければ幸いである。西脇健太郎論文では「義務年限終了後の地域医療」と題し、執筆者唯一の自治医科大学卒業生として、地域全体にアプローチする地域医療の実際をご紹介いただいた。文面からは、あふれる躍動感がうかがえる。岡裕也論文では「キャリアを捨てて、へき地医療へ」と題し、泌尿器科医からへき地医療へとキャリアチェンジした医師の心の内がありありと語られている。「目の前の患者さんを日々誠実にみていくしかない」という言葉は、まさに金言である。島崎亮司論文では、「信念で進む、まちの地域医療」と題して、都市部の診療所に赴任して数々の壁を乗り越えてきた経験をご紹介いただいた。信念に基づいていけばidentity crisisは生じないというメッセージは、まっすぐで、熱い。児玉崇志論文では、「若手診療所医師にできること、無限大」と題して、30代の終末期患者さんとの感動の物語をご紹介いただいた。涙なしに読み進めることはできない。さらに、診療所の医師にこそできることがあるという言葉は、総合診療医を目指す若い世代に勇気を与えるに違いない。

本稿を記す4月半ば。すでに世の中は新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い変化が進んでいる。家時間をいかに楽しむか、リラックスするかが、とても大事になっている。さらにはオンライン飲み会まで出現、普及し始めている。地域医療の一端を担う読者の皆様が、本誌を片手に、お茶やコーヒー、あるいはお酒を飲んでほっこりして、また明日の地域医療に少しだけ前向きになれる、そんな効果を期待したい。